

さけます情報

さけの遡る川-5 しべつ 標津川(北海道)

いちむら まさき
市村 政樹 (NPO 法人サーモンサイエンスミュージアム理事長・標津サーモン科学館館長)

はじめに

標津川は、北海道東部知床半島の付け根、根室地方の中標津町と標津町を流れる流路延長 77.9 km、流域面積 671.1 km² の 2 級河川です。標津川本流と流入する支流の多くは北部から流入し、その上流部はいわゆる溪流ですが、中流から下流にかけては泥炭地の典型的な湿原河川で、下流部の河川水はやや茶褐色の濁りがあります。標津川はかつて蛇行を繰り返していましたが、治水と土地利用開発を目的として 1932 年から 1970 年代後半にかけて河道の直線化工事が行われました。この工事は地域の発展に大きく寄与し、流域は日本有数の酪農地帯となりました。しかしながら、河道が直線化されたことにより、川は浅く単調な流れとなったため、希少種であるイトウの生息は確認されなくなり、現在はほぼ絶滅状態と考えられます。

今回は標津川に関わる歴史と現状について紹介します。

松浦武四郎と標津

穂もはや 日数へにけん しべつ河 せにつく
鮭の 色さびにけり

(訳：秋も深まり標津川の瀬にやって来るサケの姿も婚姻色の錆色に変わっていることだろう)

「北海道」の名前の名付け親でもあり、幕末の探検家でもある松浦武四郎が 1856 (安政 3) 年に標津を訪れた際に詠んだ詩です。標津川は古くから標津から斜里へ抜ける重要な交通路でもありました。松浦武四郎の「東蝦夷日誌」には、斜里か

ら清里峠を經由して標津川沿いの養老牛、中標津を經由して標津へ来たという記述があります。

「シベツ」の名前の由来は、アイヌ語の「シ・ペツ」(大きな川・本流) という説、もう一つが、武四郎が著した知床日誌の「シベツ シベツツの訛り 鮭有る義なり (サケのいる川)」の 2 説あります。「しべつ」は江戸から明治時代初めにかけて「志平津」「土部津」「標別」など様々な漢字の宛字が使われてきました。現在の「標津」の漢字が使われるようになったのは、幕末に標津代官として当地に赴任した会津藩士南摩綱紀が、当時標津の漁場支配人を務めていた加賀伝蔵に送った詩文の中で使用したのが確認できる最初の事例です。その後、南摩、加賀とも交友の深い松浦武四郎が、明治 2 年に作成した蝦夷地の郡名に「標津郡」を採用し、今に続いています。

標津番屋屏風

「標津番屋屏風」が描かれたのは 1864 年 (元治元) 年です。18 世紀、このあたりは松前藩の領地で、ラッコ毛皮や鷲羽などに加え、塩鮭・塩鱒が重要な本州向けの交易品となっていました。

幕末、標津を含む蝦夷地に新たな領地を貰い受けた会津藩は、ここに初めて自らの海を手に入れることができました。その藩士達の想いを藩主松平容保公に伝えるため描かれたものが、「標津番屋屏風」です (図 1)。この屏風にはこの地で会津藩士とアイヌの人たちがサケをとり加工していた様子が描かれています。この屏風は海側から見た様子が描かれていますが、場所は現在の標津町のほぼ中心部に当たり、写真中央のやや右側にある



図 1. 標津番屋屏風

標津神社は現在でも同じ場所にあります。また、この時代、標津川は河口部で大きく南へと蛇行しており、現在の国道 244 号線の海側（東側）に沿って流れていました。

この屏風の実物大レプリカは標津サーモン科学館で展示していますので、機会がありましたら、是非ご覧になってください。

標津川の人工孵化放流事業の歴史

現在、標津川流域には根室管内さけ・ます増殖事業協会の孵化場が 3 箇所あり、例年 4,000 万尾前後のサケの稚魚が放流されています（図 2）。標津川における孵化場の歴史は古く、1892（明治 25）年にポンリウル（ポンルル）川との合流点（標津川と俣落川の合流点より約 1.3 km 下流）に「標津孵化場」が設置されたのが最初です。なお、同年に標津町内では忠類川と薫別川でも孵化場が設置されました。

標津川孵化場は、孵化室の面積が 247.5 m²、アトキンス式孵化器で 1,000 万粒が収容できる、当時としてはかなり大規模なものであったようです。初年度の創業費は 2,288 円で標津漁業組合が支出したと記録にありますが、当時、米の価格が 10kg あたり 50 銭以下であったことや物価の高い東京の大工の日当が 50 銭だった事を考えますと、かなり高額な負担で、当時の標津の人たちの孵化放流事業への期待が伺えます。

実際、放流事業が開始されしばらくすると、孵化場周辺に産卵のため集まるサケたちが確認されるようになり、関係者の期待も高まったそうです。しかし、孵化場が設置されてから、大雪のため孵化場が倒壊したり、山火事で孵化施設が全て消失、さらに度重なる増水により流失や建物の欠損が相次ぐなど、かなり紆余曲折があったようです。標津川孵化場はこの場所に 80 年程ありましたが、湧水が少なくなったため 1974 年頃に廃止され、中標津町養老牛へと移転しました。

また、サケの捕獲場所は孵化場開始当初は孵化場周辺で行っていたと記録されています。しかし、密漁防止のため、捕獲施設は徐々に下流へと移行し、昭和 30 年代後半に現在の位置（標津サーモン科学館周辺）へと移動しました（図 3）。

ミカドチョウザメ（チョウザメ）

標津サーモン科学館では、道東地域での国内絶滅種であるミカドチョウザメ（チョウザメ）の記録について調べたことがあります。江戸時代以降、刀剣の鞘の装飾にミカドチョウザメの硬鱗などが使われるようになりました。蝦夷地の根室場所請負人の藤野喜兵衛が代々の番頭に記録させた文書



図 2. 標津川のサケの捕獲尾数と放流尾数の推移



図 3. 標津川に設置されているウライ

の中に、1834（天保 5）年から 1856（安政 3）年にかけて、合計 170 枚の蝶鮫の皮が買い上げられたことが、買い上げ値段とともに記録されていました。大型の個体は 1 枚当たり 300 文以上、米に換算すると 6 升程度で取引されており、当時、この地域としては比較的高価な商品であったようです。

また、荒井保恵の「東行漫筆」（1809）には、「シヘツ川上ね川、ほんけね川はネモロ場所之由、前々よりくすり夷人住居蝶鮫皮同油あつしの類出ル。」との記述があります。意識すると「標津川支流のケネカ川は根室場所ではあるが、釧路のアイヌの人たちが住み着いてチョウザメの皮や油をとっていた。」となります。また、他の資料からも標津川でミカドチョウザメがいたという記録があるため、標津川に生息していたのは、ほぼ確実だと思われます。

標津川における調査研究

標津サーモン科学館では、「標津町サケマス自然産卵調査協議会」の活動を通して、町内各河川で自然産卵するサケの調査を行っています。この協議会は、標津漁業協同組合、標津サケ定置漁業部会、標津町、根室管内さけ・ます増殖協会、標津サーモン科学館によって 2012 年に立ち上げた組織で設置目的は、現在の孵化放流事業に加え、

自然産卵による漁業資源の増加です。標津川においても調査定点を設けて、自然産卵個体数や発眼時生存率などの調査を行ってきました。その結果、標津川における自然産卵状況は、増水によりウライを乗り越えるサケの数は多くなく、産卵する場所は前期群が本流上流部の比較的広い範囲で産卵しているものの、後期群は支流の武佐川の更に支流であるシュラ川にある孵化場近辺に著しく集中している事がわかりました。これは、シュラ川にある孵化場で放流されているのは中期から後期群であり、親魚が生まれ育った孵化場の地下水を産卵場所を選んでいるためと考えられました。しかし、産卵個体が集中している区間は孵化場の排水口から下流の直線河道で、その河床は水の流れが滞っているためか発眼時の生存率は 22.9% (2012~2016 年, 毎年 N=10) と非常に低い値でした。

そのため、この区間の産卵環境を改善するため「バープ工」による工事を地元の若手漁業者を中心とする協議会メンバーで 2017 年に実施しました (図 4)。「バープ工」は、川の流れに対して、河岸から上流側に向けて突き出して設置する高さの低い水制で、結果として直線河道内の流路を蛇行させることが可能です。バープ工を 2 基設置した後、流路が蛇行し淵と瀬が形成され、産卵場所が分散され、さらにこの区間の発眼時生存率は 60.0% (2018~2021 年, N=6~15) と高くなりました。

この工事により増えるサケは、それほど多くはないと思いますが、今後、少しでもサケの資源が増えることを目指して、他の河川の同様の場所でもこの「バープ工」による取り組みを行っています。



図 4. 設置したバープ

さいごに

根室海峡沿岸の標津町・根室市・別海町・羅臼町には、それぞれの時代で、サケに関連する文化財が数多く残されています。特に標津町内には 1 万年前の縄文時代早期から、17 世紀に至るまで続いた遺跡が数多くあり、竪穴住居跡からサケの骨が大量に見つかっています。2020 年には、この地域のサケと共に紡がれてきた歴史文化のストーリーとして「「鮭の聖地」の物語」が文化庁の日本遺産に認定されました。

この地では、1 万年前から現代までサケを利用した人々の暮らしが続いています。人とサケとの関わりが、この後も末永く続くことを願っています。

主な参考文献

- 秋庭鉄之・末武敏夫. 1984. 根室の鮭鱒. 北海道さけ・ます友の会, 札幌. 430pp.
 北海道さけ・ますふ化放流事業百年史編さん委員会. 1988. 北海道鮭鱒ふ化放流事業百年史. 北海道さけ・ますふ化放流事業百年記念事業協賛会, 札幌. 1260pp.
 市村政樹. 2015. 根室地域におけるサケの自然再生産の現状と評価に関する研究. 北海道大学大学院水産科学院学位論文, 105pp.
 市村政樹・菊池勝祀・足立伸次. 2016. 国内絶滅種「チョウザメ」. モーリー, 44: 8-11.
 標津町史編纂委員会. 1968. 標津町史. 標津町役場, 北海道. 1102pp.
 標津漁業協同組合史編集委員会. 1989. 風雪の 90 年. 標津漁業協同組合, 北海道. 357pp.



図 5. 標津川を遡上するサケ (標津川観覧橋より撮影)